

	意識・連携・情報発信の課題解決のアイデアや意見		
	意識	連携	情報発信
立川市 社会福祉協議会 枝村委員	<ul style="list-style-type: none"> 企業や学校には「SDGs に取り組む必要があるが、テーマ設定と取り組み方法が分からない」というニーズがあると思われる。伴走支援ができる「取り組みスタート相談窓口」を提示できるとよい。 子どもや中高大学生の取り組み支援を強化することで、その周辺の大人たちの関心も高めていく。 無関心層への喚起は、タレントやスポーツ選手など著名人からの「メッセージ配信」や講演会を実施する。 	<ul style="list-style-type: none"> 「連携の規模感」に応じた活動コーディネートをする。例:自治会、商連、商工会議所、大学(学生)ネットワーク、青年会議所やロータリークラブ、地域福祉コーディネーター、ボランティア・市民活動センターなど。 活動コーディネーターの連絡会を定例実施し、異なる規模間のコーディネートにつなげる。 対面やネット上で「こんな協力がしたい」「こんな協力をしてほしい」を交換できる「活動見本市」を実施する。 	<ul style="list-style-type: none"> キャンペーン期間を設け、取り組みの周知を当委員会メンバー所属機関のような複数機関が、同時期に同一フォーマットで一斉発信する。 個々の活動を紹介する際に、活動主体者の視点と「活動を知った第三者の視点」の双方を紹介することで共感を広げる。例:「SDGs リポーター」の募集 自ら活動を言語化し、効果的な広報をするのが苦手なグループには、取材と記事づくりの広報支援をする。
立川市 商店街振興組合 連合会 山本委員	<ul style="list-style-type: none"> あえてSDGs に繋げていくような取組をするのではなく、意識をすることがスタートになるため、普段取り組んでいる業務すべてを、SDGs のゴールと紐付けて整理する必要がある。どのゴールに貢献しているか理解をしやすい環境をつくる。 	<ul style="list-style-type: none"> これまで実施してきた連携事業をSDGs と結びつけていないため、SDGs のゴールとの関係を整理する。 	<ul style="list-style-type: none"> 商店街加盟店に向けては、理事会等を通じて周知をし、同時に、連合会ホームページやSNS等を通じて、事業毎に参加店募集や、参加者募集等を行っている。 支援を必要としてくれるお店への情報提供ツールを様々な形で持っておく必要性を感じている。一般向けには、SNS を有効活用し情報発信する。 日常的に取り組んでいる事業がSDGs に繋がっていると思うので、商店街としてSDGs に取り組みやすいように、理事会等を通じて啓蒙を行っていく必要がある。
チームいま好き 笹浪委員	<ul style="list-style-type: none"> 長期的な視点で考えた場合には、子どもと若者によりアピールする必要がある。 子どもには楽しく学べ、若者には「自分の未来・将来に備えて」という点を重点的にアピールする。 アピールには、視覚的に訴えるものや、音楽を使うことも有効である。 	<ul style="list-style-type: none"> 活躍している団体、グループ、個人が一堂に会すことができると良い。「顔」がわかることが、連携には有効だと思う。コロナ禍の状況は踏まえる必要がある。 切り口、やり方、進め方は、他の団体やグループに参考となる場合も少なくない。何らかの形で発表、公表することで連携が広がる。 	<ul style="list-style-type: none"> 生活しているすべての人に関わりがあり、これが将来へと導くことを理解してもらうような発信が大事である。 SDGs のロゴ化と、それぞれの「意味」等を高齢者の方々にもわかりやすく平易な「日本語」に可能な限り訳して表現する。
立川市 自治会連合会 佐藤委員	<ul style="list-style-type: none"> SDGs の実践には、「正解」がないため、まずは身近な生活面で欠かすことのできない課題を通じて訴えると良い。 例えば「ごみの減量」と「食品ロス」の課題について、今必要なものしか買わない習慣をつける、余ったものや賞味期限の近いものは活用できるレシピを考える等の方法がある。家庭から食品廃棄物を削減し、余ったものは必要な人に渡りやすくする工夫など、一人でできなければ、共通の目標を目指す仲間を増やすような仕組みを考える。また、この課題は、流通に携わる人、消費者、生産者も一緒になって解決する知恵が必要なため、「自分らしく暮らしていける社会を目指す第1歩」など、SDGs を「自分ごと」として捉えられるような意識付けが重要。 	<ul style="list-style-type: none"> 民間や地方自治体に直接つながることのできる「窓口」をつくり、マッチング支援によりやる気のある団体を巻き込み、そこに子どもたちが参加しやすい仕組みをつくるのが重要。 子どもたちには、教科書に載っていることや試験対策だからといった学びではなく、SDGs を「自分自身の未来をつくるための学び」とすることで、面白さを増すことになると思う。 SDGs と向き合うと、相手同士のつながりや、課題同士の連携が深まり、SDGs を通じて物事を思考する力は、良い方向を目指すことができるプロデュース力のある人材の確保にもなる（人材の育成にもなる）。 	<ul style="list-style-type: none"> SDGs の優良事例の紹介や教訓を発信する。つながり、新たな行動や活動を生み出す発想が得られるような仕組みにする。 目標は「みんなのため、みんなで支える」、企業、自治体、団体、個人など誰もが参加できること、一人ひとりが主役といったゴール（2030年）を目指し、達成に向けた積極的な発信をする。 裾野を広げるために、楽しく、わかりやすく、多くの人に広く知ってもらおうきっかけとして、たちかわ広報等で周知・伝える。又はMX等のテレビで発信する。

	意識・連携・情報発信の課題解決のアイデアや意見		
	意識	連携	情報発信
立川青年会議所 片桐委員	<ul style="list-style-type: none"> ・地元企業の集まりである立川青年会議所の加入メンバーがSDGsを社業とリンクさせ、活動していくことが必要である。 ・家庭でのSDGsについては、知識の共有ができていないところもあるので、今後の課題である。 ・「まずは取り組めるところから」という意識をもつことが必要。 	<ul style="list-style-type: none"> ・関係諸団体に体質に合った取り組み方を提案し、前向きに取り組んでもらうことが必要である。 ・SDGsに取り組みたいという場合の、相談窓口、または関係者を紹介できるような窓口が必要。 ・授業に取り入れる、有識者に学校での講演などを行ってもらうなど、子どもたちに意識付けを行う方法を考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・実際に取り組んでいない、または正しくできていないことを情報発信することで、イメージの低下に繋がる。「SDGsウォッシュ」 ・取り組みのハードルを下げることで、正しい知識を学んで取り組むことを両輪で発信する必要がある。
IKEA 立川 樋口委員	<ul style="list-style-type: none"> ・社内におけるSDGsに関する情報発信、トレーニングの継続。 ・アンコンシャス・バイアスに関する意識の強化。 ・マネージャーの情報発信力の強化、社内、社外でのSDGsトピックをリーディングしていく意識付け。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ステークホルダーの方々との関係強化に努め、地域社会のニーズを正しく理解し、サポートが必要なところへサポートが届くような体制づくり。 ・視察や職業体験等の受け入れの継続。 ・外国籍の方や障がい者の採用。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ストアをはじめ、様々なメディアを通じて社会への情報発信。 ・ゲストスピーカーとして学校や地域団体主催のイベントへ参加し、イケアの取り組みを紹介することで、SDGsへのインスピレーションを与える。 ・コミュニケーション・アンバサダーの育成。
国際基督教大学 中村委員	<ul style="list-style-type: none"> ・SDGsについての知識を深める授業を行う。自分の日々の生活の何がSDGsにつながるのか、自分はどんな風にSDGsに貢献できるのかを伝える。 ・「SDGs認定員」のようなものを作る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・様々な方面からSDGsに取り組んでいる人・団体を、授業や講演会などで招いて取組を周知し、議論を行う。 ・国内のNPOや自治体、教育や福祉、地域社会や国際問題などに関わる団体でサービス活動を行う「コミュニティ・サービス・ラーニング」プログラムを通して、学生が実際にSDGs課題に取り組む機会を作る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・2021年、ICUはSDGs推進室を設置。SDGs推進室では、教授や学内の団体、地域の団体、OB、OGなどにSDGsに関するインタビューを行い、ICU SDGsウェブサイト(つながるエシカル)にて掲載している。この場で、SDGsに関する様々な取り組みを発信する。
立川市 教育委員会 寺田委員	<ul style="list-style-type: none"> ・例年実施している小学生児童会サミット・中学生生徒会サミットの本年度のテーマを「持続可能な開発目標SDGsにチャレンジ!」とし、児童・生徒が、自分たちの地域をよりよく支えるためにできることは何かを話し合った。話し合った内容は、代表生徒が各学校で報告し、新しいアイデアにつなげていく。 ・来年度の学校教育の指針の中で、「SDGsで掲げられている現代社会の諸課題について、『誰ひとり取り残さない』という考えの下、多角的、総合的に学ぶ取組を通して、持続可能な社会の担い手を育む。」と示しており、教職員への意識醸成を図っていく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・すでに各学校の連携機関は幅広く、教育委員会からも随時情報提供している。 ・本SDGs推進委員会との連携を図り、立川市のSDGsの取組を子どもたちに周知していく方法を引き続き、検討していく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・今年度、令和4年2月6日(日)実施予定の立川教育フォーラムにおいても、SDGsをテーマに話し合ったサミットの報告、中学校で取り組んでいるSDGsの取組の実践報告を行う。 ・教育委員会で作成している、小中学校の社会科の副読本に本市のSDGsの取組を掲載することが可能か、現在検討中である。
立川市役所 田中委員	<ul style="list-style-type: none"> ・SDGsに関する研修やSDGs先進自治体職員による講演等を開催し、SDGsを推進するためにどのような課題があり、どのように解決したか等、より関心を持ちやすい具体的な例からSDGsを学べるようにし、職員のSDGsへの関心を高める。 ・SDGsに貢献する業務を担当者とともに紹介する「SDGs通信(仮称)」を庁内向けに発行することで、職員がSDGsを目にする機会を増やし、庁内のSDGsの関心を高める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・立川市SDGs推進委員会のように、様々なステークホルダーが集う場を継続して確保し、SDGsを通じた連携のアイデア等について意見を交わすことで、連携の拡大や連携を深める契機をつくり、アイデアを事業の改善に生かす。 ・日常的な業務等をSDGsのゴールと紐付けて整理し、紐付けたゴールアイコンを掲げて事業に取り組むことで、同じゴールを目指す個人や団体による参加や連携のしやすさを高める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・全世帯に届く市の広報紙や市ホームページで、「マイボトルやマイバッグを使う」といったSDGsに貢献する普段の生活の例を発信し、SDGsに対するわかりにくさの解消につなげる。 ・広報紙やホームページで、市内のSDGsに取り組む個人や団体の優良事例を紹介し、SDGsに取り組むことで市内から注目を得られるようにし、SDGsに取り組む意義を生み出すほか、見学や参加に関する情報を発信し、新たな連携や取組の拡大につなげる。 ・連携した取組を行う際に、SDGsのゴールを紐付け、アイコンを掲げて発信する。 ・市政に関するアンケート等を通じて、地域が知りたい情報のニーズを把握し、ニーズに合わせた取組を行う際にSDGsを紐付けて発信することで、住民の生活の質の向上とSDGsの発信を同時に行う。